

石川県立看護大学附属地域ケア総合センター

事業報告書

第18巻

令和2年度

石川県立看護大学附属地域ケア総合センター

巻 頭 言

地域ケア総合センターは、石川県立看護大学の設立当初から本学の教育研究活動の特徴づける組織として布置されました。しかし、令和2年度は、地域活動がほとんどできなくなるという前代未聞の年になり、地域ケア総合センターは困難に直面することになってしまいました。その理由は、昨年をはじめから猛威を振るい始めた新型コロナウイルス感染症の拡大予防のため、人との交流や外出が大幅に制限されたことにあります。

この未知の感染症は、経済発展がもたらしたグローバリゼーションによって国境を超えて急拡大し、WHOがパンデミックを宣言しました。全世界が巻き込まれるという大規模な流行になり、日本もその渦中に放り込まれました。

日本では、令和2年4月から5月にかけて緊急事態宣言が全国に発出され、人-人感染を防ぐための行動規制が敷かれました。解除後も自治体ごとに緊急事態宣言期間中の行動規制に準じた施策がとられました。すなわち、生活・健康維持に必要な用事以外は外出自粛とされ、教育や研究は縮小することもやむを得ないとされました。しかし、経済活動の再開等との関係もあり、感染者数は波状に増減し、未だに不安定な状況が続いています。

本学でも国や石川県の方針に歩調を合わせ、この感染症の予防を最優先に掲げ、教員が地域に出かける活動、学生が地域をキャンパスとして学ぶ活動のいずれにも制限を加えてきました。これは、専門家であるか否かを越えた地域とも共有できる判断ではなかったかと考えています。

一方、非対面でも可能な教育方法やそのための教材づくりに教員が慣れるにつれ、教職員間では様々なアイデアで地域活動が考案され始めました。住民向けのシンポジウムや講演会は1か所への集合型ではなく、テレビ会議システムを利用したオンライン開催、事前に準備した資料・動画等を好きな時に視聴できるオンデマンド開催、両者を掛け合わせたハイブリット開催などです。また、地域側からも動画で活動状況を送っていただくことなども取りうる方法です。このような創意あふれるコロナ禍での活動の実態については本冊子をご覧ください。決してマイナスばかりでなく、参加者が増える、顔と顔の関係が作りやすいなど、今後も活かせる活動方法が編み出せたのではないかと考えられます。

このように令和2年度の地域ケア総合センターの活動は、思いがけず足踏みしましたが、年度途中で立ち直ったと総括できると考えられます。応援してくださった地域の皆さまの励ましと協力を感謝を申し上げるとともに、センター長をはじめとしたこのセンターにかかわる教職員の頑張りにも感謝します。

石川県公立大学法人 石川県立看護大学
学長 石垣和子

地域ケア総合センター「事業報告書（第18巻）」発刊に寄せて

いつも、石川県立看護大学附属地域ケア総合センターの事業にご協力いただき有り難うございます。

2020年度は新型コロナウイルス（COVID-19）による感染症拡大の影響で、予定していた事業の中には中止せざるを得ない内容もありました。しかし、6月頃から順次、感染予防対策を検討し、リモートを取り入れた実施方法を工夫しました。その結果、人材育成事業として7事業（予定8事業）、地域連携・貢献事業として10事業（予定14事業）、国際貢献事業としては1事業（予定2事業）、さらに、公開講座1件を実施しました。

公開講座では、COVID-19の感染拡大から地域や介護保険施設・障がい者福祉施設の人を守るという趣旨のもと、「こうすれば安心、コロナ禍の施設ケア」を本学で開催し、多くの参加がありました。また、人材育成事業「地域みんなで創る在宅移行支援システム」では、施設看護師のみならず訪問看護ステーション、介護支援事業所からの参加があり、コロナ禍の中でも生じている在宅看護の問題に関する有意義な意見交換を通して、地域への貢献ができたことをうれしく思います。

地域連携・貢献事業では、能登を中心とした祭りや健康支援の企画は実施できませんでしたが、かほく市の住民に本学の知識を還元する取組として、かほく市のいきいきステーションと協力した「いきいき世代とつくる健康教室」を3回実施しました。人材育成事業では、主に継続事業として、事例検討会を中心に、開催することができました。

また例年実施しています国際貢献事業のJICA日系研修は、コロナ禍の中でパラグアイからの研修生を来県による受け入れはできませんでしたが、リモートによる研修方法を駆使し、8名の研修生を対象に実施することができました。JICA青年研修は残念ながら実施できませんでしたが、次年度は実施方法を検討し実施できればと思っております。

このように、今年度はコロナ禍の状況の中、予定された事業のすべてを開催することはできませんでしたが、こういう状況の中だからこそ、本学の地域ケア総合センターが地域の人の健康維持と感染予防のためになすべきことがあることが改めて考えさせられる年となりました。今後も、様々な手法を取り入れ、地域に開かれたセンターを目指していきたく思っております。

石川県公立大学法人 石川県立看護大学 附属地域ケア総合センター
センター長 牧野 智恵

目 次

(ページ)

1	人材育成事業	
1-1	専門職研修	
1-1-1	地域のみんなで取り組む在宅療養移行支援システム	1
1-1-2	公開講座「こうすれば安心、コロナ禍の施設ケア」	2
1-2	本学教員主催の研究会・事例検討会	
1-2-1	ジェネラリストのための事例検討	5
1-2-2	ペリネイタル・グリーフケア検討会	6
1-2-3	子どもと家族への支援に関する勉強会（子育て・親子関係・虐待予防）	8
1-2-4	地域包括ケア時代に活躍する看護職 コミュニティナースとは	9
1-2-5	新任保健師スキルアップ研修会	10
1-3	相談サービス事業	
1-3-1	各種研修会等への講師派遣事業	11
1-3-2	病院への事例・活動・研究等の指導助言実施状況（再掲）	13
2	地域連携・貢献事業	
2-1	地域連携・貢献事業	
2-1-1	災害につよい街づくり事業	15
2-1-2	子育て中の母親たちのための「どろっふ・いん・さろん」	17
2-1-3	あかちゃんをお空にみ送られた方の自助グループに対するサポート活動	20
2-1-4	ヘッドマウントディスプレイを使用した「認知症疑似体験教室」	22
2-1-5	高齢者と看護学生との交流事業	24
2-1-6	いきいき世代とつくる健康教室「地域公開講座」	25
2-1-7	終末期看護実践の悩みを語り心も体もリフレッシュ	27
2-1-8	鳴子を使用した音楽運動療法講座	29
2-1-9	わたしとみんなの未来を変える SDGs ームーブメントをおこすー	31
2-1-10	か歩く健康ウォーキング事業	33
2-2	ワンストップサービス事業	34
3	国際貢献事業	
3-1	JICA 日系研修「高齢者福祉におけるケアシステムと人材育成」コース	35
4	その他	
4-1	かほく市との包括的連携協定に関わる取り組み	39

1 人材育成事業

1-1 専門職研修

1-1-1 地域みんなで創る在宅療養移行支援システム

企画担当：石川倫子 / 基礎看護学講座 准教授

1. 事業の目的

在宅療養移行支援における病院看護師と地域の看護職・介護職との連携をより深めるために事例検討を通して具体的に考える。

2. 実施状況

<オンライン事例検討会>

日 時：令和2年10月3日（土）13:00～15:30

講 師：丸岡直子（石川県立看護大学 特任教授）

助言者：出口まり子（小松市民病院）

竹田昌代（石川県立看護大学地域ケア総合センター 特任講師）

総合司会：石川倫子（石川県立看護大学 准教授）

内 容：

事例検討Ⅰ 病院看護師、訪問看護師、ケアマネジャー等との連携に関する事例検討

事例提供：穴水総合病院

事例検討Ⅱ 病院看護師、訪問看護師、行政等との連携に関する事例検討

事例提供：輪島市病院

参加者：52名

3. 実施内容

事例検討Ⅰでは、『高齢で独居の心不全患者への在宅療養移行支援』をテーマに公立穴水総合病院が事例を提供し検討を行った。病院看護師が在宅を訪問し、その人の暮らしを知り、退院拡大カンファレンスを実施し、情報共有シートを活用して、訪問看護師やケアマネジャーなどと情報および目標が共有できたことが、1年以上も患者が自宅で生活することにつながった事例であった。この事例で病院も地域の一つであることを再確認できた。事例検討Ⅱでは、『病診連携と多職種で支えた皮膚がん患者との関わり』をテーマに市立輪島病院が事例を提供し検討を行った。住み慣れた街で、自分らしく生ききった事例で、行政とも連携しその人らしさを支えた訪問看護師の行動力に参加者全員が感動と勇気もらった。

2事例ともに、ご近所の方々の支えもあり住み慣れた家で暮らすことができ、あらためて『地域みんな』で支えているのだと実感できた。初めてのオンライン研修であったが、みんながつながって事例検討はできるという自信になった。

4. 評価と今後の課題

参加者ひとり一人が事例検討をとおして、地域の医療・介護・行政職、患者・家族みんなでこの街で暮らすためにどのような連携をとればよいのかを学ぶことができた。次は、能登北部における在宅療養移行支援における連携システムを創っていく必要があり、システム創りには看護管理者のリーダーシップが重要である。次年度は、看護管理者を対象とした研修を実施しシステム創りにつなげていきたい。

1-1-2 公開講座「こうすれば安心、コロナ禍の施設ケア」

企画担当：川島 和代 / 老年看護学講座 教授

1. 事業の目的

介護保険施設や障がい者福祉施設の職員は、利用者と密着したケアの提供を避けることは難しい。ひとたび、利用者や職員に罹患者が出るとケアを媒介に感染拡大を起こしやすい。このような条件下に有る介護保険施設や障がい者福祉施設等に勤務する職員に感染予防の知識と技術を学ぶ機会を増やし集団感染を回避する対策を講じる必要がある。本学は石川県健康福祉部の委託を受けて、高齢者施設と障がい者施設の職員向けに「新型コロナウイルス感染対策の教材動画・冊子」を作成した。この教材動画等を施設ケアに有効活用いただきたいと考え公開講座を企画した。一方、介護保険施設や障がい福祉施設においては独自の工夫もされており、情報共有することは感染予防の取り組みを充実させる機会にもなると考えた。

2. 実施状況

日時：令和2年12月6日（日）13:30～15:30

場所：石川県立看護大学講堂・オンライン配信

対象：石川県内の介護保険関連サービス事業所・施設、障がい者福祉関連事業所・施設に勤務する看護職員、介護職員等

内容：座長 附属看護キャリア支援センター センター長 林 一美

感染管理認定看護師教育課程 講師 日向 千恵子

あいさつ（開催趣旨説明） 石川県立看護大学 学長 石垣 和子

1) 講演1 新型コロナウイルスの最新情報と今冬の対策

金沢医科大学臨床感染症学 教授 飯沼 由嗣

2) 講演2 介護保険施設・障がい者福祉施設の感染対策の現状と課題

特別養護老人ホーム ことぶき園 副施設長 山口 和也

3) 講演3 こうすれば安心、コロナ禍の施設ケア

～万が一、感染症患者が出ても、速やかに根拠ある感染症対策が実施できる～

公立つぎ病院 看護師長（感染管理認定看護師） 嶋田由美子

4) 講演4 利用者・ケア提供者双方の視点を踏まえた施設ケア

石川県立看護大学 老年看護学 教授 川島 和代

指定発言 石川県介護福祉士会 会長 端 久美、石川県看護協会 会長 小藤 幹恵

3. 実施内容

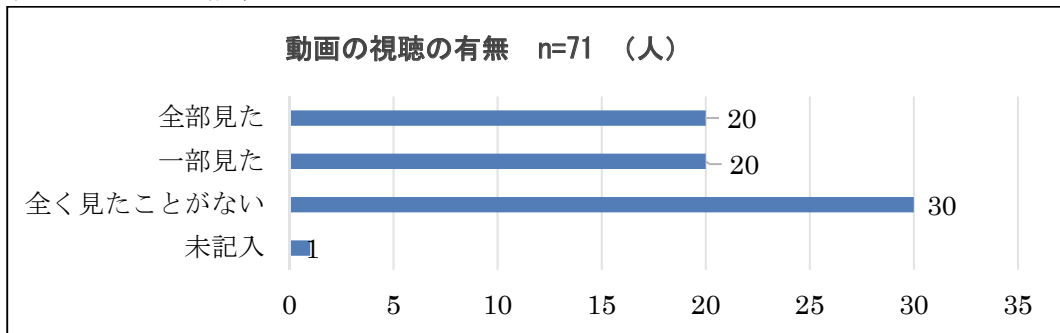
実績：当日参加者数 会場：40名、ライブ配信時の最大視聴者数：165名

終了後の録画を含めた視聴者数（2021.3.25.現在）：962名（当日の視聴者数含む）

当日参加者の背景 n=71							
1)職種	人	2)役職	人	3)勤務先	人	4)所在地	人
介護職	17	管理職	25	高齢者入所施設	35	能登北部地区	5
看護職	37	管理職以外	43	障がい者入所施設	2	能登中部地区	6
薬剤師	1	その他	1	通所介護事業所	5	石川中央地区	31
栄養士	1	未記入	2	訪問介護事業所	5	金沢市	22
事務職	2			訪問看護事業所	2	南加賀地区	6
看護学生	3			相談支援事業所	1	その他(東京都)	1
その他	10			医療機関	11		
				行政機関	4		
				その他	13		

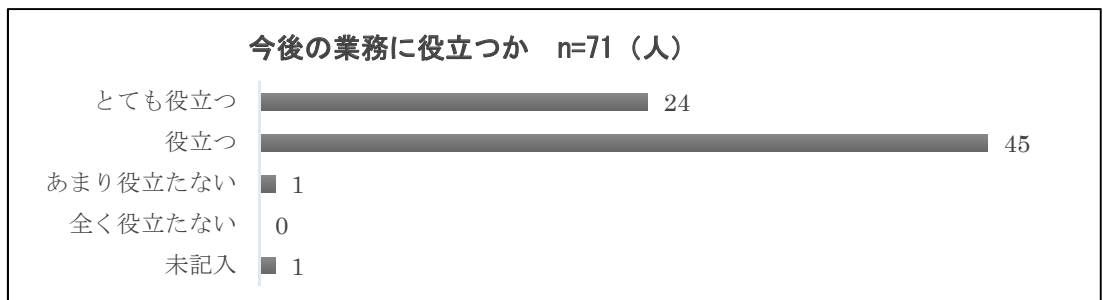
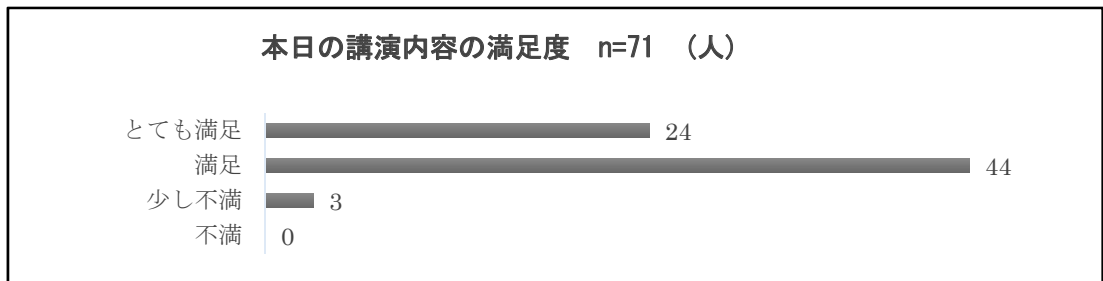
4. 評価と今後の課題

○参加者のアンケート結果



【動画教材に関する意見】

- ・わかりやすく、現場ですぐに使える内容、基本的内容、スタッフに研修会として観てもらい共有した。
- ・1つずつが短い時間だったので、毎日昼ごはんの時間に少しずつ、繰り返し見れてよかった。
- ・ガウンテクニックについて、施設内の学習に役立てることが出来た。
- ・症状があってもかかりつけ医がない方の場合はどうしたら円滑に診察を受ける事ができるか
- ・感染者が出た時の対応について、具体的にシュミレーションする場を持ちたい。
- ・職能団体の連携が大事だと思う。医療・介護の職能団体会長たちが集まり情報交換をすると共にどの様な連携ができるのか意見交換ができたらい。県及び市町村が統一した方向を出してもらおうと現場で働く職員は安心する。
- ・通所系、訪問系に対する研修も検討してほしい。訪問職員は一人で対応しなくてはならないので不安は大きい。
- ・感染症予防対策について再確認や実施できていなことがわかった。会社で他スタッフにも視聴を勧めたい。
- ・今回の講座内容を視聴できるようにしてほしい。会場オンラインでの参加が出来たので良かった。”
- ・動画ごとに主要な内容が分かるように収録項目を列記表示してあれば使いやすい

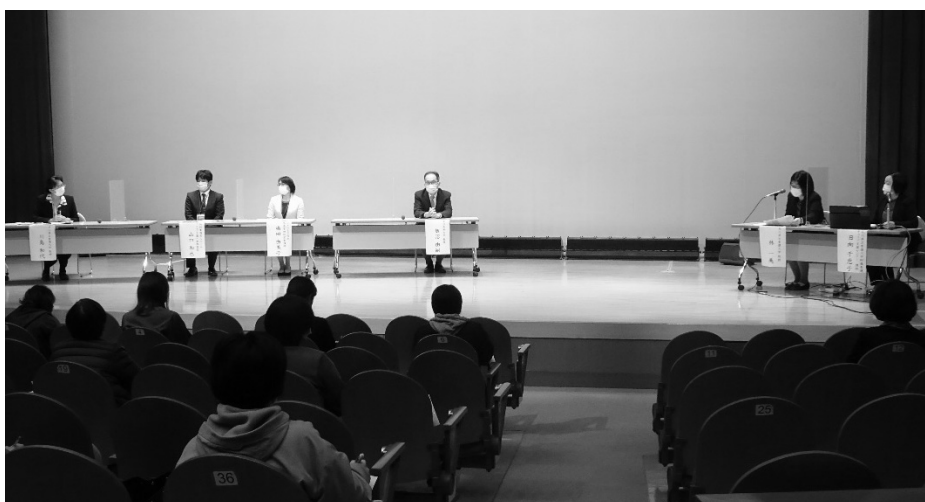
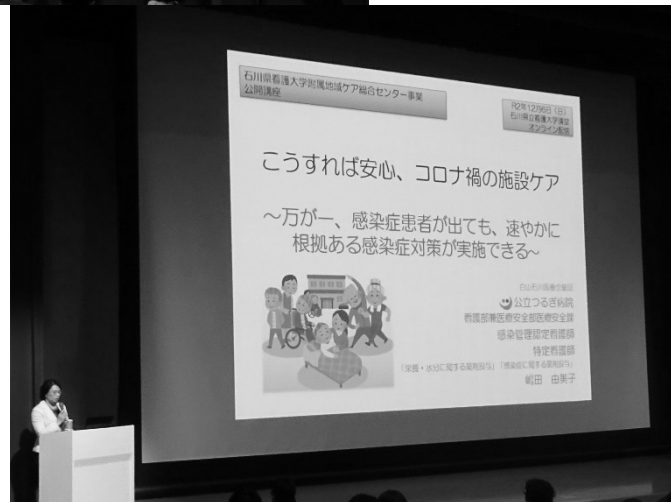
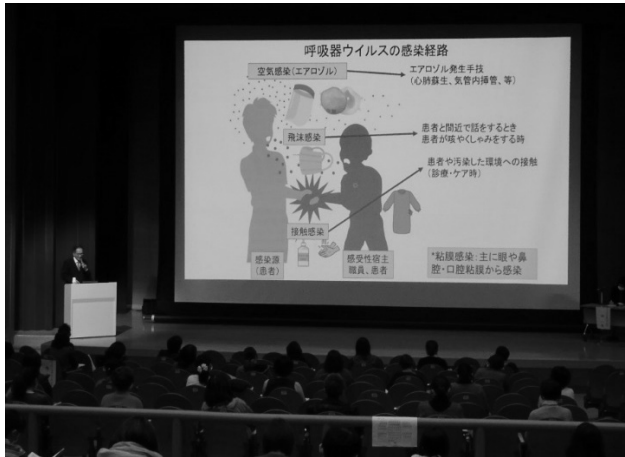


【公開講座に対する意見】

- ・コロナウイルスの基本的知識や最新情報に加え、病院・施設に関する様々な感染予防対策や入院者や入所者への心遣い、また実際にクラスターを側で見ていた経験など濃い内容の学びを受講できた。
- ・嶋田先生のシュミレーション、想定、訓練や対応の内容が大変良かった。予防ばかりでなく、もし…と考えることが大切と感じた。例を挙げて具体的な話を期待していた。もっと知りたい。
- ・人権の侵害される負のスパイラルを生じさせない。施設での発生があった時の利用者の目線、家族

への対応職員間での細かい話し合いが今後まだまだ続くコロナに対策しなければならない。

- ・飯沼先生の病態と特徴、嶋田先生の具体策を理解することで画一的に対策だけでなく個別にも対応できる。
- ・認知症の利用者に対する感染対策、マスクの装着、行動制限という身体拘束などもっと学びたい。



1-2 本学教員主催の研究会・事例検討会

1-2-1 ジェネラリストのための事例検討

企画担当：中田 弘子 / 基礎看護学 教授

1. 事業の目的

ジェネラル・ナースを対象として、複雑と思える対象の特性を看護学的な視点で的確に捉えること、ならびに実践された看護現象等を看護理論に基づいた振り返りを通して、看護実践能力の向上を支援する。

2. 実施状況

日程・講師等

第1回目：2020年8月8日（土）13時30分～16時00分

講師・チューター：中田 弘子 他

第2回目：2020年11月29日（日）13時30分～16時00分

講師・チューター：川島 和代 他

3. 実施内容

新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、オンラインでの事例検討を試行した。今年度の第1回目の参加者は24名、第2回目の参加者は16名、計40名であった。いずれも教材化した事例提供は1事例（計2事例）であった。例年、対面による事前チューター会議等は控え、担当講師間でのメールと電話での事前打ち合わせを行い、当日の各資料は画面共有とした。ZOOMのブレイクアウトセッション機能を活用し、グループワークを実施した。今年度は第1・2回ともに臨床家の参加者数の減少がみられたが、通信環境の未整備や感染対策等による臨床現場の繁忙さ等が影響したのではないかと考えられる。

半面、少人数でのワークはグループ討議の活性化がみられた。例年の紙媒体によるアンケート調査に変わる評価方法は、準備が間に合わず客観的評価には至らなかった。しかし、ZOOMでの研修は学部生も気軽に参加でき、学生からは臨床家の意見を直接聴くことにより、実際の現場での看護職や多職種の臨床における思考や判断を知る貴重な機会が得られた等の意見がみられた。

4. 評価と今後の課題

次年度の感染状況は予測できないが、オンラインによる事例検討を継続する予定である。参加者個々ならびに所属医療機関等の通信環境やデバイスの整備が進むことにより参加者は増加する可能性が考えられる。また、事例検討の評価では、Google フォームなどを活用した調査等の実施が課題である。

1-2-2 ペリネイタル・グリーフケア検討会

企画担当：米田 昌代 / 母性看護学 教授

1. 事業の目的

グリーフケアの実践を学び、地域連携の構築をはかることによって、ペリネイタル・グリーフケアの充実をはかる。

2. 実施状況

第23回 日時:令和2年7月19日(日)13:30~16:00 WEB会議システム ZOOM で開催
テーマ 「ペリネイタル・グリーフケアカフェ〜グリーフケアに携わる『私』をケアしよう!〜」
講師 石川グリーフケアの会 AsBerry 代表 菅 朱弥氏
スケジュール 13:30~14:25 語り合いの導入&自己紹介タイム
14:25~15:05 4人グループに分かれて語り合い
15:15~16:00 全体共有 講師からのコメント 次回のお知らせ
参加者 16名

第24回 日時:令和3年2月21日(日)13:30~16:00 WEB会議システム ZOOM で開催
テーマ 「遺伝看護とグリーフケア」
講師 金沢医科大学病院 看護部 外来Ⅱ (ゲノム医療センター・健康管理センター)
保健師 高瀬 悦子 氏
スケジュール 13:30 講演 1 (自己紹介・施設紹介・導入)
13:55 グループワーク 1 (3~4人ずつに分かれて自己紹介・意見交換・共有)
14:10 講演 2 (染色体・DNA 遺伝子の基礎)
14:50 事例紹介
15:10 グループワーク 2
(事例を通して感じたこと、考えたこと、今後に活かせること、質問等)
15:35 全体共有・質疑応答・講師からの情報提供 次回のお知らせ
参加者 21名

3. 実施内容

第23回

赤ちゃんを亡くされた方をケアしている中での自分たちが抱える様々な思いとその奥に潜む自分自身のグリーフについてもそれぞれが見つめることができるようにと日頃の思いを出し合っ、お互いケアしあうという意図で企画した。

まず、参加動機を含めた簡単な自己紹介の後、話し合いに入る前の導入として、菅氏より援助者のグリーフ(プロフェッショナル・グリーフ)について、自分の状態を知る・自分を受け入れる・語ることの意味、語る場でのルールについて話していただいた。その後、4人ずつのグループに分かれて、約40分語る場を持った後、全体で話された内容について共有し、菅氏からのコメントをいただいた。

第24回

遺伝についての基礎知識をおさえつつ、グリーフケアと関連する出生前診断や染色体異常・遺伝性疾患等遺伝にまつわる看護について、多職種との連携もふまえつつ、事例を通して考えていきたいという意図で企画した。始めに自己紹介をしていただきつつ、金沢医科大学病院ゲノム医

療センターについて、遺伝看護・遺伝カウンセリングとはについて説明していただいた。その後、4人ずつのグループに分かれて、遺伝や遺伝看護についてのイメージ、染色体・DNA・遺伝子についてよくわからないこと等を15分ほど話し合いをした後、その話を受けつつ、染色体・DNA・遺伝子の区別、先天異常や遺伝性疾患について説明していただいた。休憩をはさんで、2つの事例（胎児異常があった妊産婦への心理士の出生前からの心理支援、妊娠中に胎児が21トリソミーと診断された妊婦の出産・育児までの多職種連携による継続的支援）をご紹介いただき、約30分グループワークで感想や質問等話し合った後、全体で話された内容について共有し、高瀬氏からのコメントをいただいた。

4. 評価と今後の課題

今年度はコロナ禍ということもあり、初めてのZOOMでの開催であったが、事前に試験的につないだり準備を行いつつ実施したことで、当日大きなトラブルもなく、進行できた。また、遠方からの参加も可能となったため、相談のあった福岡県の病院のスタッフの参加もみられ、他県の人々との交流をすることもでき、有意義であった。

第23回

アンケート結果から、9割以上の参加者が内容・方法に関して満足と回答し、全員が今後活かせると回答していた。感想として「自分自身を知ること、ケアすることの大切さを学べた」「県を越えて話せてよかった。病棟外の人と話せる機会があってよかった」「グリーフケアで悩んでいることを共有することができてよかった」「今後のスタッフ同士のケアに活かせる」等があり、今後活かせる有意義なものとなっていた。

第24回

アンケート結果から、全参加者が内容・方法に関して満足と回答し、今後活かせると回答していた。感想として「講義とグループワークがあり意見交換しやすかった」「オンラインという形で気軽に参加できよかった」「医科大でのゲノム医療センターについての情報が得られた」「連携についての知識が広がった」「他院での支援方法や退院後の支援について知ることができた」「遺伝看護との連携に難しいと感じているところがあったが、目指すところは同じであり、お互いの役割を知ることができた。一番身近な助産師として、これからも寄り添えるようになりたいと思う」等があり、今後活かせる有意義なものとなっていた。

広報について、もっと多くの方に知ってもらえるように工夫した方がよいとの意見もあったため、近年縮小気味だった広報を見直し、次年度はこれまでの参加者にちらしを添付したり、各病棟に直接郵送する等して増員していきたいと考える。また、ZOOMでの開催については参加者側も慣れてきていると思われるため、今後も活用して実施していきたいと考える。企画委員とはメール会議で十分な意見交換ができていなかったため、今後はZOOM会議等を活用して、意見交換していきたいと考える。また、参加者を増やすためにも、アドバンス助産師の申請要件に対応できる研修とする方法についても探っていく必要があると考える。



1-2-3 子どもと家族への支援に関する勉強会（子育て・親子関係・虐待予防）

企画担当：西村真実子 / 小児看護学 教授

1. 事業の目的

対応が難しい事例等の支援を共有し、意見交換することや、新しい支援方法等の理解を深めることを通して、参加者が新たな知識・視点・考え方を獲得し、それぞれの仕事に活かすことができることを目的として、本事業を実施している。

2. 実施状況

令和2年度は、子ども虐待予防に必要な3要素「気づく・かかわる・つなぐ」を改めて理解し、実践に活かしていただけるような研修会を4回実施した。そのうちの1回は、近年注目されており、また子ども虐待や育児不安の予防的支援に役に立つと思われる、「ひといちばい敏感な子（Highly Sensitive Child:HSC）」への支援について講演いただき、理解を深める機会となった。

3. 実施内容

実施の概要は以下の通りである。

第1回

テーマ：ひといちばい敏感な子への支援

～ひといちばい敏感な子は、ひといちばい優しい子～

日時：令和2年8月6日（木）18:30～20:00

講師：明橋 大二氏（心療内科医） 参加者 62名

第2回

テーマ：気になる親子に気づく・かかわる・つなぐ力を発揮するために必要な基本的な知識と心構え

日時：令和2年8月24日（月）18:30～20:00

講師：西村真実子 小児看護学 教授 参加者 33名

第3回

テーマ：気になる親子へどうかかわるかを考える

日時：令和2年9月29日（火）18:30～20:00

講師：吉田みち代氏（開業助産師） 参加者 32名

第4回

テーマ：「つなぐ」とは？ ～気づきから関係機関とのチーム形成まで～

日時：令和2年11月10日（火）18:30～20:00

講師：常磐秀樹氏（児童自立支援施設園長） 参加者 27名

4. 評価と今後の課題

今年度は、コロナ感染予防のためにオンラインと対面の両方で開催した。子どもと家族への支援に関わっている、医療機関・保育施設・行政・学校における看護職者、教員、行政職員等（本学大学院修了生含む）、幅広い職種の参加を得た。また、遠い県外からの参加もあった。各回の後半のブレイクアウトセッションでは、日ごろの活動における課題について話し合い、交流・共有することができた。

終了後のアンケートでは、参加者の多くから「とても役に立った」「まあ役に立った」との反応があった。今後は、医療機関や教育機関・保育機関の関連職者等の「気になる親子に気づく・かかわる・つなぐ力」、すなわち子ども虐待予防の認識と実践力の強化をめざした研修会が、本勉強会だけでなく、多方面において一層充実していくことが期待される。

1-2-4 地域包括ケア時代に活躍する看護職： コミュニティナースとは

企画担当：金子 紀子 / 地域看護学 助教

1. 事業の目的

地域包括ケア時代の看護職は、病院や施設内にとどまらない多様な活動が期待されている。「人とつながりまちを元気にする」というコンセプトをもとに活動されているコミュニティナースにスポットを当て、コミュニティナースの役割や養成講座の内容、現在活躍中のコミュニティナースの実践活動について学び、地域包括ケア時代における新しい看護職の在り方を模索する。

2. 実施状況

日 時：令和3年1月23日（土） 14:00～15:30

実施形式：オンライン（Zoom）

講師：Community Nurse Company 株式会社 取締役 中澤ちひろ先生
社会福祉法人祥和会 地域密着型特別養護老人ホーム 五本松の家
施設長 田原久美子先生

参加者：36名（訪問看護ステーション、地域包括支援センター、行政、病院、大学等に所属）

スタッフ：金子紀子、牛村春奈、室野奈緒子

アドバイザー 石垣和子、阿川啓子（島根県立大学）

3. 実施内容

中澤ちひろ先生からは「コミュニティナースの役割と広がり」と題し、コミュニティナースの活動の特徴や、現場（拠点）を中心としたコミュニティナースプロジェクトへの発展、雲南市や全国各地の活動例などの紹介があった。

田原久美子先生からは「老人ホームから展開する『暮らしの保健室』ふくまちの活動 コロナ禍時代のコミュニティナース活動」と題し、施設内の活動にとどまらず、駅前でのスナックを利用した働く世代へのアプローチ、小学生が住民に手湯をしながら行う保健室など、小学生から高齢者まで様々な世代を対象に多様な場で発展的に展開されている活動の紹介があった。

講演後は参加者との質疑応答、意見交換を行い、講師のお二人からは、持続可能な活動にするための助言等があり、参加者からもうなずく様子がみられた。

4. 評価と今後の課題

終了後の参加者アンケート（回答者16名）では、内容は今後に活かせると思いますかの問いに、とても活用できる、活用できると回答した人が各5名であった。所要時間やZoomを使った研修については、よいと回答した人が8割を超えた。また、「コミュニティナースとして行っている活動が具体的にイメージできた」「職域や所属の枠を越えて地域の人々や団体とつながることで看護の幅も広がると感じた」「地域包括ケアシステムに関して、10年先を考えた時、多様な関わり方があると再認識できた」「地域にできることがあれば、地域の方々と一緒に進めていけると背中を押してもらえた気がする」「今は自分の仕事にいっぱいコミュニティナースのようにはできないが、気持ちは持ち続けたい」等のコメントがあり、コミュニティナースへの理解を通して、参加者それぞれが地域包括ケア時代に何ができるかを考える機会になったと考える。

コロナ禍のためオンラインでの開催となった。運営側の技術面での不安から、参加者は県内および関係者からの紹介にとどめたが、企画内容によっては、SNSの発信力を用いて、広く参加者を募ることも可能と考える。

1-2-5 新任保健師卒後スキルアップ研修会

企画担当：竹田 昌代 / 地域ケア総合センター 特任講師

1. 事業の目的

保健師としての実践能力を確実なものにするため、保健指導を実施するために必要な基本的な知識や技術を習得・確認するための学習会を実施し、現場で円滑な業務が遂行できるよう支援する。

2. 実施状況

実施場所：石川県立看護大学 地域ケア研修室

参加者数：県北部(河北郡以北)の市町に勤務する就業1年未満の保健師6名

3. 実施内容

・内容：

第1回 令和2年8月21日

意見交換会(保健師として就業しての悩み)
母子保健指導の実際(新生児訪問・乳児健診)

第2回 令和2年8月28日

母子保健指導の実際(1歳半児健診・3歳児健診)
母子保健指導の実際(各市町との情報交換)
成人保健指導の実際(健診結果の見方と保健指導)
保健師活動を考える(保健師活動全体)



・講師：石川県立看護大学附属地域ケア総合センター 特任講師 竹田 昌代
旧 内灘町保健師 本 弘美

助言者：石川県立看護大学 地域看護学講座 教授 塚田久恵、准教授 阿部智恵子、
講師 曾根志穂、助教 金子紀子、助教 室野奈緒子

・結果：乳幼児健診の問診のデモンストレーションや講義を通して、現場ですぐに役立てられるような母子保健指導の実際を学ぶとともに、各市町の母子保健事業についての情報交換を実施した。また、成人保健指導の実際や、先輩保健師の活動紹介を通して、今後の保健師活動を考える機会とした。

終了後の参加者アンケートからは、「細かい流れや注目ポイントをわかりやすく教えてもらえた」「他市町の事業を知る機会になり参考になった」「他市町の新人保健師との顔合わせができ、今後の情報交換ができる機会となった」、「今後の自分の活動への参考になった」等の意見が多くあった。

また、今回の研修を県北部の保健師に限定したことに対して、「地域の特性が似ている市町の保健師間での情報共有ができ、意見交換もしやすい少人数でとてもよかった」との意見もあった。

4. 評価と今後の課題

コロナ禍にあり、対象者や内容を縮小しての研修会となったが、保健師個人のスキルアップのための努力と経験の積み重ねの必要性や、同世代の保健師間のつながりや職場の他職種とのつながりを持つことの必要性を学んだ等の意見が多く聞かれ、今後の保健師業務に前向きに取り組める動機づけの機会となったようである。

新任保健師が保健指導を実施するために必要な知識や技術に自信を持ち、今後の保健師業務に前向きに取り組める動機づけの機会となるよう支援したい。

1-3 相談サービス事業

1-3-1 各種研修会等への講師派遣事業

看護・福祉・介護専門職の質の向上、県民の健康・福祉の向上、行政課題の解決に資することを目的に、看護研究の支援や、研修等へ本学専任教員が出向いた。

分野別派遣回数

番号	1	2	3	4	5	6	計
種類	病院等	職能団体 (看護協会等)	行政	学校・教育機関	福祉・高齢者関係 の任意団体	その他	
回数	21	3	8	10	5	1	48

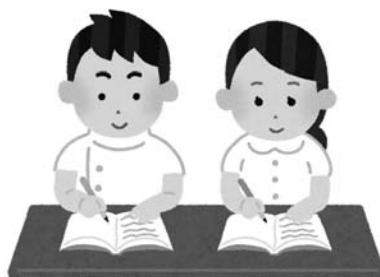
No.	派遣講師 (職名 氏名)	派遣日時	派遣場所	内容	主催者	種類 番号	回数
1	助教 大江 真吾	R2.4.1~3.3.31 の月1回 13:30~15:00	かほく市子ども発達 相談支援センター	発達障害児の生活全 般に関する講話、助 言	かほく市健康福祉 課	3	1
2	教授 武山 雅志	R2.4~R3.3 月 の第4火曜日 15:00~17:00	かほく市宇ノ気生涯 学習センター	教育相談講師	かほく市教育委員 会	4	1
3	准教授 中道 淳子	R2.7~12月 書類・メール等 での指導5回	河北中央病院	看護研究指導	河北中央病院	1	5
4	助教 大江 真吾	R2.7.3 17:30~19:30 R2.7.15 17:30~19:30 R2.8.5 15:15~16:15 R2.11.9 15:15~16:15	独立行政法人国立 病院機構 金沢医療センター	看護研究研修会講師	独立行政法人国立 病院機構 金沢医療センター	1	4
5	助教 千原 裕香 助手 河合 美佳	R2.7.14 15:05~15:55	石川県立鹿西高校	専門職探究ガイド ンス	石川県立鹿西高校	4	1
6	助教 金子 紀子	R2.7月頃 R2.10月頃 R3.3月頃	珠洲市総合病院	看護研究指導 (Web 使用検討)	珠洲市総合病院	1	3
7	講師 清水 暢子	R2.8.6 15:00~16:00 R2.9.3 15:00~16:00	能登町上町公民館	コグニサイズ教室講 師	能登町上町公民館	5	2
8	講師 清水 暢子	R2.8月初旬 16:00~18:00 R3.2~3月 16:00~18:00 R3.5~6月 17:30~19:00	公立宇出津総合病 院	看護研究指導	公立宇出津総合病 院	1	3
9	教授 垣花 渉	R2.8.18 15:00~16:00	石川県立羽咋高等 学校	フィールドワーク説明 会講師(Zoom 使用)	石川県立羽咋高等 学校	4	1
10	講師 清水 暢子	R2.9.9 17:30~18:30	羽咋診療所敷地内 友の会会館	認知症疑似体験学習 会講師	公益社団法人石川 勤労者医療協会羽 咋診療所 グループ ホームなが穂の里	5	1

11	講師 清水 暢子	R2.9.11 13:30～15:30	御代田町役場	生活・介護紫苑サポーター養成講座	長野県御代田町地域包括支援センター	3	1
12	講師 金谷 雅代	R2.9.18 12:00～15:00	石川県立錦城特別支援学校	医療のケア指導アドバイザー	石川県立錦城特別支援学校	4	1
13	教授 武山 雅志	R2.9.19 9:00～16:00	石川県看護研修センター	認定看護管理者教育課程セカンドレベル「人材管理Ⅱ」講師	石川県看護協会	2	1
14	教授 垣花 渉	R2.10.21 12:30～13:30	かほく市七塚生涯学習センター	卓話	河北ロータリークラブ	6	1
15	講師 清水 暢子	R2.11.30 14:00～15:30	白山市市民交流センター	認知症講座	白山市長寿介護課	3	1
16	准教授 中道 淳子	R2.11.12 13:30～15:30	津幡町役場	介護予防メイト養成講座	津幡町町民福祉部福祉課	3	1
17	講師 曾根 志穂	R2.11.7 9:30～10:15	かほく市立大海小学校	薬物乱用防止教育	かほく市立大海小学校	4	1
18	講師 金谷 雅代	R2.11.9 12:30～14:30	石川県立七尾特別支援学校	医療のケア指導アドバイザー	石川県立七尾特別支援学校	4	1
19	教授 米田 昌代	R2.10.31 9:30～12:30 R2.12.6 9:30～12:30	石川県看護研修センター	助産師職能委員会研修	石川県看護協会	2	2
20	教授 牧野 智恵	R2.11.28 10:40～12:10	金沢大学附属病院	分野別実践看護師養成研修	金沢大学附属病院	1	1
21	教授 紺家千津子	R2.12.6 9:30～11:00	金沢大学附属病院	分野別実践看護師養成研修	金沢大学附属病院	1	1
22	助教 田村 幸恵	R2.11.20 R2.2.	JCHO 金沢病院	看護研究指導	JCHO 金沢病院	1	1
23	教授 塚田 久恵	R2.10.28 10:00～	かほく市役所	かほく市議員研修会	かほく市議会	3	1
24	学長 石垣 和子 教授 塚田 久恵	R2.11.27 10:00～12:00 R2.12.15 10:00～16:00 R2.12.16 13:30～16:00	石川県リハビリテーションセンター 地場産業振興センター (オンライン研修)	新任保健師研修会	石川県健康推進課	3	3
25	講師 金谷 雅代	R2.11.18 10:00～12:00	石川県立明和特別支援学校	医療のケア指導アドバイザー	石川県立明和特別支援学校	4	1
26	教授 中田 弘子	R2.11.24 R3.2～3	公立羽咋病院	事例検討会	公立羽咋病院	1	1
27	准教授 中道 淳子	R2.12.17 17:00～19:00	河北中央病院	看護研究発表会	河北中央病院	1	1
28	教授 川島 和代	R3.1.25 9:40～12:10	県社会福祉会館	認知症対応型サービス事業開設者研修	石川県社会福祉協議会	5	1
29	講師 金谷 雅代	R3.2.5 10:00～12:00	石川県庁	医療のケア指導アドバイザー	石川県教育委員会	4	1
30	准教授 大森 佳子 講師 松本 智里	R3.1.30 9:00～11:30	公立能登総合病院	看護研究発表会	公立能登総合病院	1	1
31	講師 金谷 雅代	R3.2.16 13:50～15:20	石川県立ろう学校	医療のケア指導アドバイザー	石川県立ろう学校	4	1
32	講師 金谷 雅代	R3.2.1 11:30～13:30	石川県立いしかわ特別支援学校	医療のケア指導アドバイザー	石川県立いしかわ特別支援学校	4	1

33	助教 金子 紀子 室野奈緒子	R3.3	研修動画の提供	民生委員児童委員協 議会会長研修会	石川県社会福祉協 議会	5	1
34	講師 金谷 雅代 寺井梨恵子 助教 瀬戸 清華	R3.3	石川県立中央病院	看護研究講評	石川県立中央病院	1	1

1-3-2 病院への事例・看護活動・研究等の指導助言実施状況 (再掲)

地区	派遣病院名	指導内容	講師名		回数
金沢	金沢大学附属病院	専門的看護実践力 研修事業講師	教授	牧野 智恵	1
			教授	紺家 千津子	1
	独立行政法人国立病院機構 金沢医療センター	看護研究講師	助教	大江 真吾	4
	河北中央病院	看護研究指導	准教授	中道 淳子	6
	JCHO 金沢病院	看護研究講師	助教	田村 幸恵	1
	石川県立中央病院	看護研究講評	講師	金谷 雅代	1
能登	公立能登総合病院	看護研究指導・研修 会講師	准教授	木森 佳子	1
			講師	松本 智里	
	公立宇出津総合病院	看護研修講師	講師	清水 暢子	3
	珠州市総合病院	看護研究指導・講評	助教	金子 紀子	3
	公立羽咋病院	事例検討会講師	教授	中田 弘子	1
計					21



2 地域連携・貢献事業

2-1 地域連携事業

2-1-1 災害につよい街づくり事業

企画担当：武山 雅志 / 心理学 教授

1. 事業の目的

宮城県亶理郡亶理町では被災された多くの住民は仮設住宅から災害公営住宅へとその生活基盤を変化させている。しかしその地域自体、高齢化が進んでおり、新しい絆づくりには外部からの働きかけが必要な状況である。

令和2年度は引き続き亶理町社会福祉協議会や地元民生委員の方々と連携して、その絆づくりに学生によるボランティア活動を活用するとともに、地元かほく市での「災害につよい街づくりフォーラム」開催を通じて、頻発する自然災害への備えについて考えるのが目的である。

2. 実施状況および内容

○準備会：10/16

○災害につよい街づくりフォーラム 2020

日時：11/29（日）9：30～11：00

場所：石川県立看護大学 講堂 参加者：106名

内容：「やってみないとわからない（避難所編）」（能美市危機管理課）

「かほく市洪水ハザードマップについて」（かほく市防災環境対策課）

「地域防災学習の取組」（かほく市立河北台中学校）

「地域防災の取材からみえたもの」（かほく市高校生ボランティアサークル）



○被災地学生ボランティア活動

新型コロナウイルスの感染状況が収束しないため、例年のような貸切バスによる訪問は断念し、オンライン交流会を企画した。しかし亘理町の新型コロナウイルスの感染状況がよくないため、集会所に集まっていたことができなくなった。その結果、代替案としてトートバックの飾りつけとメッセージ色紙づくりを実施し、年賀状等をやり取りしている亘理町の100名の方々にお送りした。本企画には4年生2名、3年生8名、2年生2名、1年生3名の合計15名の学生が参加してくれた。



3. 実施成果

新型コロナウイルス感染状況の影響で、災害につよい街づくりフォーラム2020は例年の内容を変更して県内および市内の活動報告となった。今回はじめて中高校生の報告があり、防災意識が広い世代に受け継がれていることが実感できるものであった。

4. 評価と今後の課題

災害につよい街づくりフォーラムを開催して5年が過ぎ、地元の防災関係者の活動も広がりを見せている。ただ防災への取組は地域格差が目立ち、全体を底上げしていく必要性を感じている。来年度以降はまだ防災訓練をすることすらできていない地域に対して、防災訓練を活発に実施している地域の方々が講師を務める形での市民防災講座を開催することで、かほく市全体の防災意識の向上を目指していきたい。

2-1-2 子育て中の母親たちのための「どろっぷ・いん・さろん」

企画担当：西村 真実子 / 小児看護学 教授

1. 事業の目的

継続的な支援の実現には、「何かあったらこの人に相談しよう」というような信頼関係を築くことが重要であり、そのためにはまずは親子と支援者が、または親同士が短期に集中して会い、お互いを知り合い分かり合う必要がある。「子育てどろっぷ・いん・さろん」は、育児困難に悩む親同士および支援者と親との信頼関係を育てながら親を継続的に支援していこうとするシステム(妊婦プログラム→乳児の母への Nobody's Perfect(NP)プログラム→幼児の母への NP プログラム→フォローアッププログラム→本さろん)の最終段階の支援策である。子育てに悩みをもつ母を対象に、

- ①エンパワーメント(自己効力感を高める等)
- ②サポートし合う仲間づくり
- ③自分に取り入れられそうな子育て等のやり方や考えを得る
- ④自分の客観視
- ⑤子育てへの不安や困難感の軽減
- ⑥レスパイト・ケアの6点をねらいとし、子どもと離れて過ごす場所の提供と、悩みについて安心して話せるグループミーティングなどを行った。

2. 実施状況

今回は新型コロナ感染予防対策に留意する必要がある、実施場所の選定や開催に伴い、感染症対策について関係機関との調整に時間を要した。計画では8月から5回開催の予定であったが、9月から4回開催となった。特に開催場所の選定は、我々がかほく市で「Nobody's Perfect(NP)プログラム」を実施しており、かほく市担当者と協議し、感染症対策を取りながらの実施を了承され、「子育てどろっぷ・いん・さろん」の開催に至った。

[実施した感染症対策]

- ・参加者の厚生労働省「COCOA アプリ」のインストールの推奨
- ・Google フォームによる開始2週間前からの県外移動や症状の確認、来場時の検温の実施。
- ・参加者のマスク、マウスシールド、フェイスシールドの着用
- ・テーブルでのアクリル板の設置、室内の換気、空気清浄機、開始前後の使用物品やテーブルの消毒
- ・各テーブルに消毒液の設置、個包装の粉末飲料を受付時に選択。紙コップの使用、個包装のお菓子を個別の紙皿で配布。
- ・託児利用者には、かほく市の子育て支援センターにおける感染症対策の施設利用のお願いを事前に送付。他の施設利用者とは別室での託児の実施。

1)どろっぷ・いん・さろん(午前):託児を行い、母親には一人でまたは、他の参加者と自由に過ごす時間・場所を提供する。スタッフも母親の相談に対応した。

2)親育ち・子育てを考える会(午後):Nobody's Perfect 親支援プログラム(以下 NP)参加経験のある母親を対象に、託児を行い、NP方式を取り入れたグループミーティングを全4回行った。

【スタッフ】西村真実子、米田昌代、金谷雅代、曾山小織、千原裕香、後藤亜希

【実施場所】かほく市子ども総合センターおひさま

回数	開催日	るーむ参加者	考える会参加者	託児児童数
1回	R2.9.16 (水)	6名	7名	3名
2回	R2.10.7 (水)	6名	6名	4名
3回	R2.11.11 (水)	6名	6名	5名
4回	R2.12.2 (水)	8名	6名	6名
参加者数(延べ人数)		26名	25名	18名

3. 実施内容

「NP 親育ち・子育てを考える会」で話し合われた主なテーマ

- 1回目：お互いを知ろう 自分の気がかりを話そう・みんなの気がかりを聴こう
子どもとの関わり方
- 2回目：イライラのコントロールについて
- 3回目：夫について
- 4回目：兄弟間の関わり、子どもが園や学校に行きたがらない、自分のコントロールやスケジュール管理など、話しやすい事を話す。



・どろっぷ・イン・るーむ(午前)では、参加者が他の母親と話をしたり、ゆっくりお茶やお菓子を食べてリラックスしていた。母親から個別相談を受ける事も多かった。妊娠中の母親については、居住地の子育て支援の内容や妊娠中からの支援が必要のため、保健師への支援依頼をした。日々の子どもの関係に悩む母親が、自らペアレンティングプログラムの受講希望されたことに対して、実施している児童相談所を紹介した。自殺企図のある児を持つ母親には、相談機関を伝え病院受診に繋がった。不登校の原因の一つに担任との関係性の悪化があると推察する母親に対しては、教育機関の相談窓口を紹介し、会の終了直後に直接相談機関に向かうことに繋がった。その後、学校の教頭と担任と母親との3者面談となり、子どもへの対応を協議され、子どものストレスが軽減し、登校が少しずつできるようになった。子宮頸がんへの不安や今後の妊娠計画などを含めて不安が募っていた母親に対しては、検査の受診勧奨や今後の母親の体調と育児の調整についてアドバイスされた。夫が児に手が出て困っている母親の場合やDVが疑われる場合など、会場がかほく市の子育て支援センターのため、さろん終了後に担当者との相談につながった。コロナ禍において各市町の支援が滞る中、なかなか母親が気持ちを聞いてもらえる機会が減っているため、こうして母親同士で集まれる機会が貴重であると話されていた。

・**親育ち・子育てを考える会(午後)**では、参加者から「日々の子育てでいっぱいいっぱい誰も大変さを理解してくれないし、子どもの事は最終的には親以外、誰も責任取ることはいらないだろうという緊張感やむなしさのなかで子育てしている。この会は、気のはらない人と安心して話ができ、本当に大切な場所だなと感じた」とことや、「夫や親にはうまく甘えられないが、ここではどんな話でも聞いてもらえて、自分が唯一甘えられる場」という感想が聞かれた。これらのことから、同じような悩みを抱える仲間を受け入れられることにより安心感や心の余裕等が生じ、加えて悩みや経験・考えをサポーターに共有する話し合いを通して、現実吟味/カタルシス/自分に取り入れられるやり方・考えの獲得等が起り、日々の子育て等にプラスになったり、子育て状況の悪化の防止になっていることが伺えた。

4. 評価と今後の課題

・どろっぷ・イン・るーむ(午前)

スタッフ(教員)が専門職であり、またさろんに参加する前にNPプログラムにも参加していることから、話しやすい雰囲気は自然とできており、敷居の低いアクセスビリティの高い母親への支援のひとつとなっている。

・親育ち・子育てを考える会(午後)

・乳幼児期の親を対象とした話し合いの場は子育て広場などいろいろあるが、思春期の子どもを持つ親が参加できる場は少ない中、このどろっぷ・イン・さろんでは思春期を迎える子どもへの接し方や自分の更年期や親の介護について考える機会もあり、幅広い年齢層の子どもを持つ親同士の仲間づくりの場となっている。思春期特有の悩みも出てくるようになり、親と子の関係性だけでなく、友人同士の関係性の困難さがある。友人とのトラブルから学校で馴染めず、不登校や自殺企図など深刻さも増している。母親への支援だけでなく、子どもへの支援の検討も今後の課題である。

・コロナ禍での子育てで、母親の孤立化が進んでいる。ある母親は、「コロナで全然遊び場に行けないし、前は他のお母さんと話す事で、ストレス発散できていたけど、ママ友さえ作れない。子どもと家にこもりきりで毎日、私が死ぬか、子どもが死ぬかのギリギリ。だからここに来れるだけでみんなからパワーもらえる。」と話されていた。コロナ禍で子育て広場や託児の使用制限があり、母親のレスパイトできる場所が激減している。広場等での母親同士のピアサポートも減少しているためコロナ禍での開催の必要性は高い。より一層の感染症対策をしながら、本さろんを継続する必要があると思われる。

・市町が実施するハイリスク支援とは違うが、専門家が行う子育て中の母親たちのための「どろっぷ・イン・さろん」が、母親への支援の一つとなれば、このさろんの存在意義があるのではないか。次年度もニーズのある母親に届くよう工夫していく。

2-1-3 あかちゃんをお空にみ送られた方の自助グループに対するサポート活動

企画担当：米田 昌代 / 母性看護学 教授

1. 事業の目的

あかちゃんを亡くされ方がアクセスしやすいような体制作りと会の広報、お話会開催によって、あかちゃんを亡くされた方の自助グループ活動を支援する。また、個別相談体制、医療施設・行政との連携を強化していく。

- 1) お話会の運営をサポートする。
- 2) 体験者、臨床、地域からの相談があった場合、個別相談もしくは、5つの自助グループのネットワークを通じて対応できる。

2. 実施状況 3. 実施内容

①お話会開催 日時・場所

対象：あかちゃん（流産・死産・新生児死亡・乳児死亡等）であかちゃんを亡くした方
ひまわりの会は年齢を問わずお子さんを亡くした方、グリーフケアカフェはあらゆる喪失に対応

回数	月日	時間	主催	場所	参加人数
第1回	R2. 4. 25 (土)	10:00~12:00	グリーフケアカフェ	ZOOMでの開催	2
第2回	R2. 6. 1 (月)	9:30~11:30	小さな天使のママの会	ZOOMでの開催	6
第3回	R2. 6. 21 (月)	10:00~12:00	グリーフケアカフェ	ZOOMでの開催	3
第4回	R2. 7. 25 (土)	13:30~16:00	ひまわりの会	松任ふるさと館	5
第5回	R2. 8. 29 (土)	10:00~12:00	グリーフケアカフェ	シェアマインド金沢	4
第6回	R2. 10. 5 (月)	9:30~11:30	小さな天使のママの会	石川県立看護大学	6
第7回	R2. 10. 25 (日)	10:00~12:00	グリーフケアカフェ	シェアマインド金沢	4
第8回	R2. 10. 25 (日)	13:30~16:00	ひまわりの会	石川県社会福祉会館	6
第9回	R2. 12. 19 (土)	10:00~12:00	グリーフケアカフェ	シェアマインド金沢	5
第10回	R3. 1. 24 (日)	10:00~12:00	ひまわりの会	石川県社会福祉会館	3
第11回	R3. 2. 1 (月)	10:00~12:00	小さな天使のママの会	シェアマインド金沢	7
第12回	R3. 2. 13 (土)	10:00~12:00	グリーフケアカフェ	シェアマインド金沢	5

*R2. 4. 26 (日) ひまわりの会はコロナ禍のため中止

②適宜メール相談・電話相談・面談

- ・富山でお話し会（ポコズカフェ@富山）を開催したいという体験者のサポート（病院に申しを置かせていただくという依頼に同行する予定であったが、コロナ禍のため、延期中）
- ・グリーフケアカフェに参加してくださった方の依頼で家族面談を実施
- ・メールでの相談適宜対応 臨床からの紹介、直接メールでの問い合わせ等計5件対応
その内、1人はお話会に参加

③ひまわりの会 自死予防活動

R2. 7. 19(日) 13:00~17:00 こころの健康づくり講演会 運営・参加

「ありのままに生きる～自己肯定感を知る～」講師 平野 直己 先生(北海道教育大学)
石川県・かけがえのない命をまもるネットワークいしかわ(ひまわりの会・小さな天使のママの会所属) 主催

④体験者の話を聞く場

R2. 7. 22 (水) 13:00~14:30 母性看護方法論の講義枠で自助グループ代表者・メンバーの方に語っていただく。

⑤広報活動

今年は特にちらし配布等してはず 今年度初めてホームページに活動報告を掲載した。

⑥全国のあかちゃんを亡くした方の自助グループ、支援者との情報交換

東アジアグリーフの集い 2020 オンライン (ZOOM) による交流 (R2.12.13 (日) 開催)

4. 評価と今後の課題

今年度はコロナ禍の中、開催に苦慮したが、ZOOM 等活用しつつ、1 回のみの中止で抑えることができ、開催回数を確保することはできた。しかし、機器に不慣れな方は参加することができなかった。後半は会場を確保し、感染拡大に留意しながら、お話を開催することができた。しかし、涙が流れたりとマスクを外す場面もあったため、今後は対策を考える必要がある。コロナ禍で孤立しやすいという背景もあったのか例年よりもメールや面談での個別相談も多かった。お話し会まではハードルが高い方にはじっくり話を聴くという個人的関わりが大切になってくる。今後も対応していきたい。お話し会は今年度は参加者が少ない会もみられたが、少ないながらも思いを共有できたり、メンバー同士のつながりが生まれたりと有用であった。今後も感染に配慮しつつ、可能なかぎりリアルに逢える場所でお話し会を開催していきたいと考える。

お子さんをお空へみ送られたみなさんに

一人きりで悲しみにくれていますか？
み送られたお子さんのことやお気持ちや苦しみを分かち合いたい方と
一緒に語り合い、気持ちをわかち合いたい方と
そばで少しでも天を信じたい
お話を聞いてくださるとなっています。
体験者とともに活動者がサポートしています。

個別対応
お話し会の定期的開催

活動目的
ひとりでお悩みの方にはお話を聞いて気持ちを分かち合いたいです。

ひまわりの会 電話 090-2833-0427 (夜間)
E-mail: himawari@npo.com

我が国を失ったお母さん、お父さん、お孫さんに寄りかかっています。

子ども喪失のママの会 連絡先 090-4481-0378 (夜間)
E-mail: childrenloss@npo.com

SIDS 喪失の会 連絡先 090-3750-0311 (夜間)
E-mail: sids@npo.com

ハートシェアの会 Mail: heartshare@npo.com

天使のゆりかご 石川県立看護大学 母性心療看護学講座内 窓口 申請受付
Mail: angel@npo.com

※本会が主催する、お話し会の開催は、お話し会への参加費を徴収していません。お話し会に参加する方は、お話し会に参加する費用を負担する必要があります。

このグループが主催してお話し会をお送りいたします。お話し会には、お話し会に参加する費用を負担する必要があります。

2-1-4 ヘッドマウントディスプレイを使用した『認知症疑似体験教室』

企画担当：清水 暢子/ 石川県立看護大学 講師

1. 事業の目的

本企画は認知症疑似体験プログラム用に開発されたDVDを使用し、参加者にはヘッドマウントディスプレイ；HDMを装着してもらい、そこに映し出される映像や音声により認知症高齢者の視線や移動の速度、行動を疑似体験してもらう。その体験が参加者への認知症高齢者の理解をうながす啓発活動として、また認知症を正しく理解すること、認知症高齢者に対して人間としてあたたかく接することができるような認知症支援者への啓蒙活動促進を目的とする。

2. 実施状況

- ①羽咋診療所グループ 認知症疑似体験学習会の参加者 15名
(至:令和2年9月9日(水)17:30~羽咋診療所、友の会会館)
- ②白山市認知症講座の参加者 20名
(至:令和2年11月30日(月)14:00~白山市市民交流センター はくさんホール)

3. 実施内容

認知症疑似体験プログラム用に開発されたDVDを使用し、参加者にはヘッドマウントディスプレイを装着してもらい、そこに映し出される映像や音声により認知症高齢者の視線や移動の速度、行動を疑似体験してもらうもので、今回は「トイレを探して編」を使用し、2階建ての住み慣れた自宅でトイレが見つからないことの不安や焦り、混乱する様子を疑似体験してもらった。初めに「認知症の理解と予防」についてスライドを使った講義を30分受講してもらい認知症の正しい知識について学んだ後、疑似体験を行い、その後グループ討議の中でトイレを探してさまよう認知症当事者の気持ちについて振返ってもらった。

4. 評価と今後の課題

参加者からは「自分が現在介護をしている中で、より相手の気持ちに寄り添う必要性を感じました」、その人それぞれの行動に対して、いかに周囲の接し方が大切かがわかりました」、「どんな思いで行動されているのかを思いやることを、あらためて感じた」など、認知症当事者の方が感じている不安や迷い、恐れなどを疑似体験を通して感じていただき、自分たちに何ができるのかを考えていただく良い機会となった。地域で見守り活動を続けている方から「6年前から徘徊の対応に地域で取り組んでおり、(今回の参加が)今後の活動の確認ができました。」との心強いご意見もいただいた。

認知症当事者の理解を多くの人に進めていく中で、今後の課題は実際に地域住民として出来ることは何があるのか、その支援は当事者、支援者にとって負担にならずに持続的に出来ることなのか否か、また、現在、支援を行っている人達は今後の方向性として現在をどう評価し、今後何を進めていくのが良いのかを参加者と共に検証していく機会を作り、具体的な支援活動につなげて行きたいと思う。

写真 1. 白山市市民交流センター はくさんホールでのヘッドマウントディスプレイを使用した認知症疑似体験中の参加者



写真 2. 動画を使った「徘徊する認知症当事者の理解」についての講義風景



写真 3. 認知症当事者の気持ちについてヘッドマウントディスプレイを体験した後に、その様子について語る参加者



2-1-5 高齢者と看護学生との交流事業

企画担当：曾根 志穂 / 地域看護学 講師

1. 事業の目的

学生が高松地区の高齢者宅(自立されている方、虚弱な方、独居の方)を訪問し、高齢者の生活の場に身を置きながら高齢者とのコミュニケーションを図り、その暮らしぶりや考え方を感じ取り、高齢者やその家族が必要とする保健医療福祉サービスなどを考察することにより、地域で働く看護職である保健師による保健活動やその役割を学ぶ。

2. 実施状況

5月と11月ごろ、年2回の訪問を計画していたが、新型コロナウイルス感染症予防のため中止し、代替活動として、12月に3年次学生から高齢者へ手紙を送付した。

3. 実施内容

高齢者46名に、学生の直筆手紙と健康情報パンフレット、いきいきライフ質問票、返信用封筒を同封して郵送し、いきいきライフ質問票の記載、返送を依頼した。30名から返信があり、質問票には今の生活の様子や思い、学生への応援メッセージ等が記載されていた。

4. 評価と今後の課題

高齢者からの返信内容には学生の訪問を楽しみにしている旨の記載が多くあり、手紙も喜んでいただけたと考える。学生も訪問をしたかったという意見があるため、今後訪問が再開できるまで、かほく市の担当者と連携し、高齢者との交流を維持するための工夫が必要である。



2-2-5 いきいき世代とつくる健康教室「地域公開講座」

企画担当：塚田 久恵 / 地域看護学 教授

1. 事業の目的

本事業は本来 2 つの目的で実施する予定であったが、新型コロナウイルス感染症の感染状況により、本年度は下記①のみ実施した。

- ① かほく市いきいきステーションにて地域公開講座を開催し、看護大学教員の知見を市民に還元する。
- ② いきいきステーションに定期的に訪問し、学生・教員と地域のシニア世代との交流活動を行い、学生においては対象理解や地域のニーズ把握を促進し、シニア世代には社会参加の機会となる。

2. 実施状況

いきいきステーションの協力のもと、地域公開講座を 3 回実施した。

企画書をいきいきステーションに提出、開催概要を提示し、いきいきステーションからかほく市の広報誌に掲載、各回の参加者募集を依頼した。

3. 実施内容

① 地域公開講座（全 3 回）

- | | |
|--------------------------------|------------|
| <第 1 回>10 月 14 日（水）13:30～15:00 | 担当者：今井秀樹教授 |
| テーマ：検査結果の見方、活かし方 | 参加者：10 名 |
| <第 2 回>11 月 18 日（水）13:30～15:00 | 担当者：塚田久恵教授 |
| テーマ：健康情報の入手、理解、活用する力について考えよう | 参加者：7 名 |
| <第 3 回>12 月 9 日（水）13:30～15:00 | 担当者：垣花 渉教授 |
| テーマ：どこでも 今すぐできる健康づくり | 参加者：10 名 |

各回参加者は 7～10 名であった。感染対策のため、会場も収容人数 30 名程度の会場に 10 名程度を限度とし、体温測定、換気、消毒を十分に行い開催した。また、内容も測定やグループワークなどは行わず、講義形式で行った。しかし、質問なども多く、テーマについて参加者に考えてもらう機会となった。繰り返しの参加者もあり、広く知識を学んでもらえるなど、成果はあったと考える。次年度のテーマの希望もあがり、市民の健康生活への貢献は今後も必要と考える。

4. 評価と今後の課題

本年度は、開催時期を早めて 8 月からの開催を考えていたが、感染状況を考え、回数も減らし 10 月から 3 回の開催とした。かほく市の広報誌、いきいきステーションからの案内により、外出を控えていた方々が、少しずつ声かけにより参加されていた。参加者からは、ためになったという声もきかれ、健康への働きかけにつながっていると考える。本年度は本学担当者の提供可能なテーマで講話を企画したが、地域住民のニーズも参考にして、次年度の企画につなげたい。



2-1-7 終末期看護実践の悩みを共に語り心も体もリフレッシュ

企画担当：牧野 智恵 / 石川県立看護大学 教授

1. 事業の目的

オルゴール療法には「治療効果」として、「想像力の開発」「心理的効果」があるといわれている。看護師は、受け持ち患者の死と向き合う体験をしても、ゆっくり自分の心を癒せる場がない。そういった体験者同士が、オルゴール療法や自らの体験を語る場の中で、悲嘆を乗り越え、今後の看護実践を意味あるものできると期待される。

2. 実施状況

本企画は、実施責任者（牧野）の他、成人看護学領域の教員（瀧澤理穂、今方裕子）と、学部生のボランティアに協力いただき実施した。

開催日時・場所：

1回目：令和2年8月8日(土)10:00～13:00 石川県立看護大学 地域ケア総合センター

2回目：令和2年9月12日(土)10:30～14:00 ハーブの里・響きの森（ミントレイノ）

参加者：1回目は7名、2回目は9名で終末期実践に悩みについて自由に話し合いをした。
(ほか、学部生2名が参加)

3. 実施内容

第1回は、これまでの終末期看護実践を通しての思いや悩みについて自由に語り合った。

第2回は、白山市のミントレイノにて、アロマスプレーづくり、庭園の散策、オルゴール療法などのリフレッシュ体験を行った。その後、第1回の対話を踏まえた終末期実践における気持ちの変化やグリーフケアの必要性について語り合った。

いずれも新型コロナウイルス感染拡大防止のため、3密を避け十分な感染対策の上で実施した。

【プログラム 2回目（ミントレイノ）】

10：30～11：30 アロマスプレーづくり、庭園の散策

11：30～12：30 オルゴールセラピーの体験

※3密防止のため2グループにわかれ交代で実施した。

12：30～13：30 休憩

13：30～14：30 対話

14：30～ アンケート、解散

4. 評価と今後の課題

1回目では参加者が抱える終末期ケアに対するジレンマ（患者を一人で逝かせてしまった、業務に追われて側にいられなかった等）や、同僚や上司からの共感や理解が得られないことへの辛さを中心に語られていた。中堅以上になると個人の看護実践能力が高まるがゆえに組織の在り方に疑問を抱き、個人の努力ではどうしてもできない問題（患者の急変、緊急入院など）に直面し、苦悩していることが窺えた。

2回目では他の参加者も同様の悩みを抱えながら日々の看護に取り組んでいることを共有し、悩みを抱えたままでもいいのだという感覚や、自身の経験を新人や後輩指導に活かしたいという発言が生じていった。またアンケートの結果からも、1回目終了時の参加者は「曇った気持ち」であったが、2回目終了時には「晴れ晴れした気持ち」に変化していたことがわかった。本企画を通してオルゴールの響きとアロマの香りに癒されながら対話を行うことで、日々の終末期看護実践の悩みを心も体も癒される機会となった。

今回、地域や所属施設が異なる看護師同士が参加したからこそ、組織に対する思いも自由に表出できたように思われた。今後は参加者の語りの内容やアンケート結果の分析を通して、終末期実践を抱える看護師が望むグリーフケアの在り方や、効果的なリフレッシュ企画についても検討し、施設の垣根を超えた看護師の癒しの場を提供していきたい。



様々な植物のある庭園を散策（キーウィの木）



オルゴール療法を体験しストレス解消！



対話タイムで終末期看護の悩みを共有しました。

2-1-8 鳴子を使用した音楽運動療法講座

企画担当：清水 暢子/ 石川県立看護大学 講師

1. 事業の目的

運動習慣の少ない高齢者でもストレスが少なく運動継続できる方法として、「鳴子を使用した音楽を伴う運動療法 (MMT プログラム)」を利用し参加者に馴染みの深い曲に合わせて、高齢者サロン指導者とともに振り付けを考案し、高い認知機能と運動機能を同時に要求されるマルチタスクトレーニングを参加者に体感、その地域で普及啓発してもらう。強いてはその地区の介護予防活動の一助として役立ててもらふことを目的としている。

2. 実施状況

実施日：①2020年8月6日(木)、②9月3日(木) 15:00~16:00

③2021年3月24日(水) 14:00~15:00「e-鳴子の体操教室」

会場：①, ②能登町上町公民館 1階多目的ホール 石川県鳳珠郡能登町字上町

③愛知県長久手市イオンモール長久手ホール 愛知県長久手市長久手中央

参加者：①, ②上町公民館コグニサイズ教室参加者 10名

③ 長久手市高齢者 ICT 活用介護予防教室参加者 20名

3. 実施内容

能登町上町公民館では、新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止のため、ミニデイサロンや介護予防教室、老人クラブなどの『通いの場』の活動の自粛や外出の機会が減り、運動不足や人との交流の機会が少なくなっている中、参加者には体温測定、手指洗浄、体調確認を行った後、会場での参加者同士の距離を十分に空け、会場の換気を行い、参加者へのマスク着用を義務づけ、会場に入る参加者人数も10人までと厳しい制限を設けて実施した。指導者もフェースシールドにクリアマスクをつけ、馴染みの深い曲(演歌)に合わせて、鳴子を振りながら上半身を大きく動かす様誘導した。

また、コロナ禍による高齢者サロンが開催できない自治体や、サロン主催者用に簡単に誰でも指導できる様、大学ホームページ上に「e-鳴子の体操教室」の動画配信を行った。その活用方法について、長久手市高齢者 ICT 活用介護予防教室参加者に、オンライン中継による鳴子の音楽療法を実施した。参加者とはオンラインの画面を通じて鳴子の音楽運動療法を体感してもらった。

4. 評価と今後の課題

コロナ禍で自粛生活が続く高齢者の中にもフレイルや認知症進行が危惧されている。このような状況下でも楽しく音楽や体操が継続できればと今回、コロナ感性予防対策を行いながら、この事業を実施した。そのため、曲に合わせての発声は行わなかったが、それでも音楽に合わせて鳴子を鳴らすというデュアルタスク運動に、参加者は刺激を受けた様子であった。コグニサイズ運動では、「グッパ体操」のほか、課題を動作の間に入れた「手延ばし体操」に、参加者は苦戦していた。

自粛生活が続いている参加者にとって今回の教室は、心身ともに良い刺激となった様だが、今後も自粛生活が継続することによる生活不活発状態が続くことが予測される。そのため、新しい生活様式への適応や、新しい介護予防教室の提案、自宅でも簡単に行える体操教室として「e-鳴子の体操教室」の普及活動とともに、ICTを高齢者の介護予防に活用する事業を推進していきたい。

写真 1:コグニサイズ・グッパ―体操



写真 2 : 鳴子を使用した音楽運動療法



写真 3 : 「e-鳴子の体操教室」を動画配信したサービス



2-1-9 わたしとみんなの未来を変える SDGs

—ムーブメント、アクションをおこす—

企画担当：寺井 梨恵子 / 基礎看護学 講師

1. 事業の目的

令和2年度より本事業を開始した。事業の目的は、①学生と地域住民の交流を行いながら SDGs に取り組むこと、②ESD（持続可能な開発のための教育）を通して持続可能な社会づくりの担い手を育む教育を行うことである。

2. 実施状況

1) 「SDGs 入門編ワークショップ」

日 時：令和2年9月5日(土) 14:00～16:30

形 式：オンライン(Zoom)

講 師：地域おこし学び舎 代表 阿部昭彦先生

司 会：寺井梨恵子(石川県立看護大学)

参加者：10名(本学学生5名、教員5名)

2) 「SDGs de 地方創生カードゲーム体験会」

日 時：令和3年2月23日(火)13:30～16:30

場 所：石川県立看護大学(かほく市)

ファシリテーター：株式会社プロジェクトデザイン 長瀬めぐみ先生

サブファシリテーター：寺井梨恵子(石川県立看護大学)

スタッフ：松本智里、三輪早苗、瀬戸清華(石川県立看護大学)

参加者：17名(本学学生12名、教職員5名)

3. 実施内容

1) 「SDGs 入門編ワークショップ」

今回は、SDGs の概要、誕生の背景から自分ごと化し、「わたしができること」を探し、実践につなげるという意図で企画した。ワークショップでは「SDGs を自分の言葉で伝えること」を目標とした。阿部先生より SDGs の背景、17 のゴール、世界や日本の現状について話していただきながら、ワークを行い、自分の言葉で参加者は SDGs について理解したことを共有した。ワークショップの中では、2回ブレイクアウトルームを使用し、参加者(学生と教員)がパートナーシップを築きながら、思ったこと、感じたことを素直に伝えあい、短時間ではありましたが、対話を通して交流を深めた。

参加者からは「今までは、SDGs は何か自分とあまり関係なくて遠いところにある感じがしていたけど、今回のワークショップを通して、自分の生活が世界につながっているということを感じた」「日常生活のなかでどんな活動ができるか考えていこうと思った」「参加して本当に良かった」「有意義すぎる時間だった」「次回も楽しみ」「微力かもしれないけども無力ではないという言葉を大事にして、1歩ずつ取り組みたい」等があり、今後活動への機運が高まった様子がうかがえた。



2) 「SDGs de 地方創生カードゲーム体験会」

SDGs de 地方創生カードゲームは、「中山間地域にある人口数万人の小さなまちが、今後12年間でどうなっていくのか」をシミュレーションするゲームである。参加者は、「住民」または「行政職員」に分かれて、①それぞれの志を達成すること、②持続可能なまちを実現することを目的として、それぞれが考えて行動した。刻一刻と変化するまちの状況（人口、経済、環境、暮らし）を見ながら、また熱狂しながら、体験を通して多くの学びを得た。

<参加者の感想>

- SDGs についての理解を深めることができた上、とても面白いプログラムであった。
- 予想以上に楽しくて驚いた。また絶対に参加したい。
- 始めはSDGsをゲームで経験することのイメージがわからなかったが、繋がる・連動しているということを体感することができた。
- 言葉だけでは上手くわからない「物事は相互に関係している」というところなどをゲームとして体験することができ、理解を深めることができたように思う。一見関係ないように見える行動が全体を良くすることにつながるということを学ぶことができた。また、自分本位で行動するだけでは現状を悪化させることもありうるということにも気づくことができた。
- 地域創生のため、多業種交流やリーダーシップの必要性などを学ぶことができた。
- 大変分かりやすかった。最後のまとめは、とても分かりやすく、体験会でのゲームの意味を自分の中に落とすことができた。

4. 評価と今後の課題

参加者がSDGsを自分事として捉え、ゲーム体験会を通して、すべてのゴールが繋がっていること、協働を行うことについて体感することができた。「SDGs de 地方創生カードゲーム体験会」は、早々に定員を満了し、その後も申し込みがあったがコロナ禍での開催であったため定員外はお断りした。今後は「SDGs de 地方創生カードゲーム体験会」等を含めて定期的開催しつつ、活動を軌道に乗せ、地域住民と学生が交流する機会にもしたい。



2-1-10 か歩く健康ウォーキング事業

企画担当：石川県立看護大学健康づくり研究会代表 武山 雅志

2016年度から2019年度まで「か歩く健康ウォーキング事業」に参加登録した334名の中、2016年度から3年間継続的に参加した61名（3年間継続群）と2017年度2年間継続的に参加した23名（2年間継続群）のデータにおける開始年度から最終年度における判定の変化を分析しました。

分析項目は初年度の分析において効果が認められた3分間歩行、筋肉量、体脂肪率、POMS-IIにBMIを加えた12項目としました。

3分間歩行の判定では、両群ともに9割以上が良好な変化を示していました。筋肉量の判定においては、両群ともに8割程度が良好な変化を示していました。体脂肪率の判定では、両群ともに良好な変化を示したのは2～3割にとどまっていました。BMI判定において良好な変化を示したのは、3年間継続群で6割、2年間継続群で7割でした。POMS-IIの判定では、いずれの項目も両群ともに開始時点で「要注意」と判定される方は少なく、それを維持または改善するという結果でした。

1日あたりの平均歩数は開始年度と最終年度を比較して減っている方が両群ともに7割程度でした。

開始年度と最終年度の判定の変化にバラツキがみられた体脂肪率とBMIについて、1日あたりの平均歩数の増加との関係を調べましたが、両項目ともにその関係ははっきりしませんでした。

なお3年間継続群の中から比較的良好な結果が見られたお二人に、お話を聞くことができました。万歩計をつけていることで「1万歩という目安を意識して足りない時はもう少しと歩くようにしている」という話や、「身体の痛みがなくなったのを契機に歩きはじめ、健康教室へも通っている」と日常生活の中に運動を取り入れることで体調も良いという話を聞くことができました。

運動を無理のない形で日常生活に取り入れ継続していくことで、確実に心にも体にも良い変化があることが明らかになったと感じています。



2-2 ワンストップサービス事業

1. 事業の目的

ワンストップサービス事業の目的は、石川県内の市町村、企業、NPOなどの市民を対象とした地域貢献事業についての相談を受け付け、運営が円滑に行われるように支援することである。また石川県立看護大学が立地する地元かほく市の企業をはじめ、石川県内における看護・介護・福祉等の領域におけるさまざまな製品や用具の開発など、本学専任教員との共同研究について相談窓口を一本化し相談体制を整えることである。

2. 令和2年度の事業実績について

令和2年度の実績はなかった。

3. 今後の課題

石川県内の自治体、関係機関等のニーズをよりきめ細かく把握するとともに、本学教員の研究テーマとのマッチングを行い、地域の課題解決に向けた取り組みができるように具体的な方策を打ち出していきたいと考えている。

3 国際貢献事業

3-1 JICA日系研修

「高齢者福祉におけるケアシステムと人材育成」コース

担当：中道 淳子 / 老年看護学 准教授

この研修事業は独立行政法人国際協力機構（JICA）の委託を受け、石川県立看護大学と羽咋市社会福祉協議会が実施運営する。中南米日系社会支援の一環として平成19年度から開始され、令和元年度までで13期の研修生を受け入れてきた。14期目となる今年度は、コロナ禍にあり、研修員の来日が叶わず、遠隔研修を行うこととなった。

1. 研修目的

高齢者福祉制度や日本の伝統的な文化、ケアシステム、介護予防について学び、高齢者福祉対策の組織的な対応を行うための仕組みや機能の重要性について幹部層の（知識と）意識の向上を促進する。

2. 研修実施体制

- (1) 研修コース名：「高齢者福祉におけるケアシステムと人材育成」遠隔特別プログラム
- (2) 技術研修期間：2021年1月12日から 2021年1月29日まで
- (3) 研修員名：アスンシオン：吉田牧子、高橋直江、大前美子
イグアス：幸坂幸子、西山由紀美
ピラポ：佐藤真奈美、高橋千恵美、水本愛夏
下線は以前に本学の日系研修を受けている方

3. 研修内容（スケジュール参照）

日本の高齢社会で明らかになってきた介護予防に関する知識を習得できるよう、①～⑨についてオンライン学習後、Zoomにて質疑応答を行う。

日程		内容	受講方法
1月12日	火	20:00～21:00 開講式及びオリエンテーション	Zoom
1月13日	水	動画で学ぶ I	YouTube 上の 5 つ動画を 1/17 までに視聴し、動画を見 てわからなかったこと や、これらのテーマに関連 したボランティア活動上の 悩み等をまとめる。
1月14日	木	① 日本の高齢者の生活・実態を知る（中道）	
1月15日	金	② 加齢変化を理解する（中道）	
1月16日	土	③ 高齢者の生理学について理解する（平居）	
1月17日	日	④ 栄養学の基礎の基礎的理解（平居） ⑤ 高齢者の栄養ケアについての理解（平居）	
1月18日	月	8:00 メールでの質問受付締切 20:00～22:00 オンライン質疑応答	Mail/Zoom
1月19日	火	メールでの質問回答	Mail
1月20日	水	動画で学ぶ II	YouTube 上の 4 つ動画を 1/23 までに視聴し、動画を見 てわからなかったこと
1月21日	木	⑥ 健康寿命や介護予防の概念を理解する （塚田）	
1月22日	金		

1月23日	土	⑦ 高齢者の運動についての理解（塚田） ⑧ 高齢者の体力測定についての理解（中道） ⑨ 楽しい地区活動例（羽咋社協）	や、これらのテーマに関連したボランティア活動上の悩み等をまとめる。
1月24日	日	8:00 メールでの質問受付締切 20:00～22:00 オンライン質疑応答	Mail/Zoom
1月25日	月	メールでの質問回答	
1月26日	火	20:00～22:00 意見交換 「日系社会における介護予防活動の展開方法について考える」	Zoom
1月27日	水	自主研修（レポート作成）	
1月28日	木	自主研修（レポート作成）	Mailにて事前提出
1月29日	金	8:00～9:30 成果発表及び閉講式	Zoom

4. 研修目標・評価指標

(1) 研修目標

日本の高齢社会で明らかになってきた介護予防に関する知識を習得し、健康寿命の促進に向けて現地での活動に活かしていくことを目指す。

(2) 指標

日系社会で高齢者福祉のシステムや人材育成に関して、個人的なスキルアップのみならず、組織的に今後のことについて取り組んでいくための具体的な活動を計画できる。

5. 達成度

研修最終日の成果報告において、移住地ごとに今後、取り組む内容について発表することができた。

アスンシオンでは、3名の研修員によって、以下の3つの課題（①～③）に対してそれぞれプランを作成しました。

①利用者状況が十分に把握できていない。（→1. 虚弱・ロコモ予防のチェックリスト、2. デイサービスの食事を安全に楽しく食べる）

②利用者の心身機能の低下が心配。（→3. 利用者の方々へ電話で声かけ、4. オンライン体操で筋力アップ、5. 楽しく体を動かす工夫）

③デイサービスでの感染予防。（→6. 具体的な感染予防の実施）

イグアスでは、2名の研修員によって、多くのプランが立案されたが、コロナ禍でもできることに限れば、ぬりえの配布を続けることに加え、以下の配布物も検討する。研修の「楽しい地区活動例」で紹介されていた干支の図案を切って貼る、貼り絵や研修中に紹介された資料「通いの場開催の8の工夫」「私たちの体は食べ物でできている」など。また、高齢者へ時々電話をしたり、ぬりえを配る時に、近況を聞いたり困りごとはないか聞く。ボランティアのモチベーションが下がらないよう、今回の研修の報告などもプランに挙げられた。

ピラポは、3名の研修員によって、プランの立案がなされた。コロナ禍でもできることとして、イグアス同様に今回の研修に関して他のボランティアメンバーと共有することと、外出禁止の高齢者宅をボランティアが家庭訪問して、家の中で運動を行うよう、家の人にも説明するプランがたてられた。その際、高齢者がどんな体操をしたらよいかわかりやすいように、DVDを配ることを今後、検討していくこととなった。また、草の根支援事業の実施に向けて、定期的に看護大学やJICAと連絡を取りあっていくことも確認した。

6. 研修コースに対する所見

(1) 研修期間、研修内容について

初めての遠隔研修であり、Zoom 実施時には音声の不具合が何度かあった。しかし、回数をこなしていく中で、日本側もパラグアイ側もうまくつなげてディスカッションできるようになった。しかし、事前に作成したオンライン教材に対して、事前にメールで質問を送ることに限っては、出来る研修生とできない研修生に分かれた。そのような状況においても、各移住地で助け合って学習を進めることができていた。

(2) 研修効果を高める工夫

研修員の日本語能力では、日常会話はできるものの、資料の漢字などがわからないことがあったため、オンライン教材は、できるだけ平易な表現とし、漢字にはルビをうって対応した。

(3) 研修運営体制について

研修実施機関である看護大学と羽咋市社会福祉協議会、JICA 北陸の3機関で協力・連携して実施することができた。また、JICA 北陸から、JICA パラグアイ事務所と連携し、現地の状況について聞きながら研修準備を進めていただいたと共に、研修中にもオンライン環境や修了証など細々とした面で研修運営をサポートいただいた。JICA パラグアイ事務所とパラグアイ日本人連合会との連携もあり、研修生の資料のプリントアウトなどのご協力があつた。

7. 次年度への提案、改善点

具体的なアクションプランを立てるにあたっての時間がタイトであったことから、来年度はその時間をもう少し長くとしたスケジュールとすると良い。また、現地の看護師資格を持つ方や、これまでの日系研修に参加された方々をアクションプラン作成時に巻き込んでいくような働きかけを検討している。

時差が12時間あることで、Zoomをつなげている時間はAM8時前後とPM8時前後であり、一部のディスカッションは休日に行われた。ディスカッションまでに資料作成等の作業も必要であり、それらを考慮してなるべく平日にディスカッションできるようなスケジュールとする。

8. その他、特筆すべき活動実績及び成果

例年は、看護大学関係者、羽咋市関係者のみで成果報告を聞いていたが、今年度は、羽咋市の地域活動を行っている世話役の高齢者にも成果報告を聞いていただくことができた。日系移住地での今後の活動について知ることができただけでなく、そこで行われている内容に関して教えあう姿も見られた。今後、オンラインを利用して更に進んだ交流も期待できるのではないかと考える。

今回、オンライン研修にしたことにより、開講式には、パラグアイ日本人大使、パラグアイ日本人連合会会長などに出席いただくことができた。成果報告会をパラグアイ日本人連合会会長やJICA パラグアイ事務所の方々に聞いていただいたことより、今までの日系研修についても知っていただく機会になった。今後、JICA 青年ボランティアとの協働や日本人連合会との繋がりなどネットワークを広げていくには、大変良い機会であったと考える。

研修の光景（スナップ写真） 写真1 開講式におけるスクリーンショット



4 そ の 他

4-1 かほく市との包括的連携協定に関わる取り組み

企画担当：牧野 智恵 / 石川県立看護大学 教授

1. 令和2年度の取り組みについて

平成22年10月に石川県立看護大学とかほく市が包括的連携協定を締結し、本格的な活動を開始して9年目を迎えた。

本年度は本学が幹事となり、2回の協議会を開催した。

- ① 8月5日(水)第1回協議会：令和元年度の事業実績報告および令和2年度事業案について
- ② 12月17日(木)第2回協議会：令和元年度事業の進捗状況報告と令和2年度の計画立案について

かほく市から11事業、石川県立看護大学より2事業が提案され、かほく市からの提案事業のうち1事業が中止、3事業が会議・打ち合わせのみとなった。また、石川県立看護大学から提案された「高齢者と看護学生との交流事業」については、今年度は対象者宅への訪問は中止し、代替活動として、12月に学生から対象者への手紙による交流を実施した。しかし、コロナ禍の状況でも、感染予防策を講じつつその他の事業が実施できたことは、今後の実施に向け大きなアイデアが得られたと思う。

特に、コロナ禍の中で、自宅に引きこもりがちな高齢者を対象とした「いきいきシニア活動推進事業」では、これまでの会場を広い会議室に移動し、入場者を制限するなどの工夫をすることで、3回実施できた。10月14日は「検査結果の見方、活かし方」今井秀樹教授、11月18日は「健康情報の入手、理解、活用する力について考えよう」塚田久恵教授、12月9日は「どこでも今すぐできる健康づくり」垣花渉教授が実施した。

	主催	事業 (市担当課)	看護大担当
1	かほく市	かほく市ケーブルテレビ事業 (企画情報課)	垣花教授他
2		健康ブランド化事業 (健康福祉課)	武山教授他
3		発達障害に関する相談事業 (健康福祉課)	大江助教
4		いきいきシニア活動推進事業 (長寿介護課)	塚田教授他 (地域公開講座)
5		地域支援事業 (長寿介護課)	(会議のみ)
6		通いの場における介護予防事業 (長寿介護課)	(会議のみ)
7		家族介護者教室 (長寿介護課)	(会議のみ)
8		かほく市体力テスト (生涯学習課)	(コロナ禍にて中止)
9		問題を抱える子ども等の自立支援事業(学校教育課)	武山教授
10		教育相談事業 (学校教育課)	武山教授
11		妊娠期から切れ目のない育児支援事業 (子育て支援課)	西村教授、千原助教
12	看護大	高齢者と看護学生との交流事業 (長寿介護課)	塚田教授、曾根講師
13		災害につよい街づくり (防災環境対策課)	武山教授

2. 令和3年度に向けての事業実施についての検討

令和2年度はCOVID-19 新型コロナウイルスの影響で、中止せざるを得ない事業があったが、今後は感染予防対策を講じつつ、地域の人々がより健康な生活ができるよう、本学の知恵と技術を活かした事業を検討していきたい。また、かほく市の各課の生涯学習課、健康福祉課、長寿介護課

といった各課の垣根を越えて、かほく市との包括的連携協定に基づく事業の実施をしていきたい。

今後は、石川県立看護大学の新採用の教員や若手教員の新鮮な意見や専門性を活かしつつ、かほく市のご協力を得て、研究フィールドを広げるきっかけにもなるような取組ができればと考えている。



石川県立看護大学附属地域ケア総合センター

事業報告書（第18巻）

令和3年5月発行

発行：石川県立看護大学附属地域ケア総合センター

〒929-1210

石川県かほく市学園台1丁目1番地

Tel.076-281-8308 Fax.076-281-8309

© 2015 Ishikawa Prefectural Nursing University.
All rights reserved.

著作権は石川県公立大学法人に帰属する。

